

第IV部門

視野を考慮した商店街の色彩分析 ～道頓堀・南京町と地域性～

大阪工業大学工学部 正会員 ○松谷 俊兵
 大阪工業大学工学部 東 朋佳
 大阪工業大学工学部 正会員 田中 一成
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞

1. はじめに

色彩は一般的に常に人間の生活に存在しており、人間の心理に大きく影響を与える。良好な都市空間を考える際、色彩という要素を考慮することは必要不可欠である。

近年、個性的な色使いの建物の装飾や、屋外広告物などの増加により、都市には多くの色が混在している状況にある。その中には、周囲の人々に不快感を与える色使いも多く存在している。この問題は「騒色」と呼ばれる公害問題にも発展しており、裁判で実際に処分が下った事例もある。「騒色」とは周辺環境との調和を著しく乱すと共に、人々に不安や不快感を与える望ましくない色使いのことをいう。各自治体も、景観ガイドラインの作成を行うなどにより地域景観の保全と推進を促しているが、実際には実施されていないところが多いのが現状である。色彩計画を行うにあたって、ガイドラインなどがあるのにもかかわらず実施されていない背景には、その地域の特色など具体的な指標がないことも一因と考えられる。

2. 研究の目的と方法

色彩を意識して街を眺めていると、観光地のような都市を代表する地域はその都市の中でも様々な色が使われているように感じられる。例えば道頓堀は、目立ちたい、目立たせたいと気持ちが強く出ており、色使いが派手なものや独特なものも多く存在する。しかし、この賑やかで活気を感じる色使いも違う面からみると、ごちゃごちゃしており、周囲との調和も感じられない騒色をもつ街並みととれる。しかし、道頓堀の例に見られるように騒色は人々に不快感を与える色使いという意味だけでなく、実は使用方法次第で、新たな指標になるのではないだろうか。都市の活性化を図る際、賑やかさを測る指標を見つけることができれば、今後の都市計画を行う際に地域性の演出や賑やかな街づくりに利用できるのではないかと。

そこで本研究では、都市内の商店街における色彩の使われ方に着目し、色の変化を分析することで、人の多く集まる商店街の特色・特徴を把握し、地域らしさ、ここでは、大阪らしさを測る指標を見つけることを目的とする。

都市の色彩分析を行い、それぞれの特徴や特色、表現方法を把握する。ここでは人間の心理と関係する提案に結びつけるため、人間の視野を考慮し現地調査で得た画像を対象に商店街の特徴を数量的に記述・分析していく。

3. 対象地

対象地の選定において、住宅地域や工業地域のように比較的単調な色使いがされていると予想される地域ではなく、地域の特徴を持つと考えられる代表的な商業地区を対象とし、人通りが多くかつ街全体に活気がある観光地を対象とした。様々な店舗が密集しており、それぞれの店舗ごとに屋外広告物や独自の外装などが混在しているため様々な色使いが凝縮されていると考えたためである。この条件に沿って大阪では道頓堀(図-1)、神戸では赤系統の色で統一されているように見える南京町の中華街とする。



図-1 グリコネオン

Shunpei MATSUYA, Tomoka AZUMA, Kazunari TANAKA and Shin YOSHIKAWA

4. パノラマ画像を用いたシーケンス分析

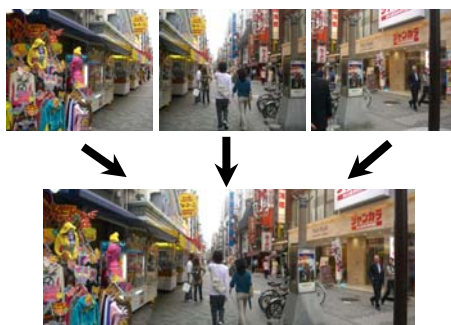
視線方向を変えて3つの画像を撮影し、それらを合わせて1枚のパノラマ画像とした。彩度、明度のカラーテーブルを使用し、画像の色数を減らした画像を用いて、各商店街内部を対象に連続的に分析を行った。

その結果、道頓堀は連続的に見ると大きい変化はないことが明らかとなった。また、比較的にみて変化がほとんどない部分も、南京町より多い。以上のことから、色相や連続性以外ににぎやかさを感じる要因があると推測された。次に、画像一枚を全体で見るのではなく、視野で認識できる範囲とその周囲を比べより詳細に分析を行っていく。

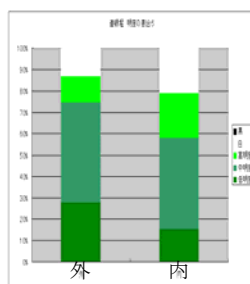
5. 視野を考慮した分析

両目視野を用いてパノラマ画像（図－2）を切り取り（図－3）、視野の内側、外側に分けて分析を行った。その結果、道頓堀と南京町共に彩度の変化が少なかった。また、道頓堀では外側よりも内側の方が高明度が多いことがわかった。このことから、彩度の変化ではなく明度に着目した。道頓堀は内側の明度が高い状態にあり、南京町は道頓堀に比べ明度の低い状態ではないかと仮説的に設定した。

各画像の外側、内側の明度の割合を算出し、対象地区間の比較を行った。次に、道頓堀と南京町の外側同士、内側同士を比較した。以上の結果、道頓堀、南京町共に視野の内側が明度が高いことが明らかとなった（図－4、図－5）。また、道頓堀にその傾向が顕著に出ていた。次に、道頓堀と南京町の外側同士と内側同士を比べると、道頓堀のほうが常に高明度が多い状態であった。このことから、にぎやかに感じる商店街では視野の内側において明度が高い状態にあると推測できる。



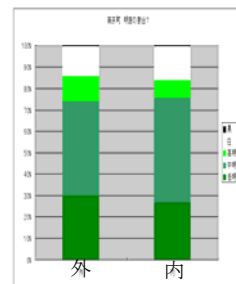
図－2 パノラマ画像



図－4 道頓堀明度割合



図－3 視野での切り取り



図－5 南京町明度割合

6. 一般的な商店街との比較・検証

観光地における色彩の特徴を検証するために、地域を対象とした通りについて調査・分析を行い、観光地で得た結果と比較した。その結果、地域を対象とした商店街でも内側の方が高く、観光地としての特徴といえるまでには至らなかった。しかし、道頓堀は他の商店街に比べ明度が高いということが明らかとなった。

7. おわりに

本研究の調査・分析を通して、騒色とを感じる原因は、景観の連続性ではなく一部分だけでも感じるということがわかった。また、色の使い方には様々あると考えられるが、視野の外の明度が地域性に対し大きな影響を持っていることを明らかにした。

色彩には他にも数多くの概念や考え方も存在し、違った角度からの分析が必要といえる。対象地区、光、時刻の設定など検証不足の面もあるためこれらの精緻化を今後の課題とする。